

願わくば、これを語りて、  
平地人を戦慄せしめよ

明治43年、柳田國男が岩手県遠野市に残る民話を聞き書きした『遠野物語』。同書が発刊されてから今年で100年目を迎えます。遠野市役所に設置された100周年プロジェクト推進室の小向室長にお話を聞きました。

### 語る・舞う・祝う

柳田國男の『遠野物語』が発刊された明治43年6月14日から数えて100年目を迎えます。記念すべき日は月曜なので、週末12・13日に記念事業を計画しています。記念事業のコンセプトは「語る」「舞う」「祝う」。市民と市が協働して企画が練られました。「語る」では、遠野の歴史・食・郷土芸能・生業・昔話の語り部を育てる「語り部1000人プロジェクト」で学んだ376人が活躍します。「舞う」は夜神楽としし踊り。遠野には市内13地区に異なるしし踊りがありますが、『遠野物語：119話』に残るしし踊りの歌詞で全団体が13日に舞うことになっています。

### 市民と行政の協働で 祝う100周年

全国的に行政が主導して市民に参加してもらうイベントが多いなか、この記念事業は市民からの提案をもとに市民と市が協働して実施する形式をとっています。遠野市では、こうした市民と行政の協働事業が少なくありません。たとえば用水路を直してほしいと市民が要望しても市は優先順位をつけざるを得ません。そこで市民が「自分たちがやるので市も負担してください」となったら市が補助を行います。100周年記念を迎える昨年から今年にかけては、郷土文化を継承する市民提案の事業に、事業費の9割を



市が負担し事業が行われています。

### 現代に継承される 遠野の伝統文化

市内の小中学校では表現活動や昔話の語り部、郷土芸能など『遠野物語』に関わる活動をしています。私が小学生だった昭和40年代には『遠野物語』を学ぶ機会はほとんどありませんでしたが、暮らしの中に伝統文化がまだ息づいていました。たとえば小正月の作物の吉凶占い。焼いた胡桃を12個並べ、ボーボー燃えるとその月は日照り、ヒューヒュー音がすると風が吹くという具合です。豊作を祈った小正月行事は今も伝えられています。馬と娘の悲恋物語として知られる遠野の代表的な昔話「オシラサマ」は養蚕の神、吉凶を知らせる神など、信仰の対象として遠野の旧家に今も祀られています。

100年前と同じ信仰や郷土芸能、行事などが今も暮らしの中に息づいています。『遠野物語』の序文には「願わくばこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と記されています。近代化する明治期に、普通の人の暮らしを見直し、それらを語り継ぐ大切さを柳田が述べたものです。

ぜひ遠野で日本人の原点を感じてください。

### 小向 孝子

Komukai Kouko

遠野物語100周年プロジェクト推進室長。遠野市生まれ。仙台の大学で学び、帰郷後市役所に勤務。

